

刊行にあたって

山本光正

国立歴史民俗博物館においては、平成二〇年七月一日から八月三十一日まで企画展示「旅―江戸の旅から鉄道旅行へ―」を開催した。

レジャー全盛の現在は旅行も格安旅行から豪華旅行、そして海外旅行も当然の時代であり、TVも旅行番組を頻繁に放映している。本展示においては現代のこうした旅行の源流を近世に求め、いかに旅行の繁栄を招来したかを明らかにすることを目的とした。

展示の前提として近世あるいはそれ以前から明治中期に至る迄の徒歩による移動を旅、鉄道等の交通機関による移動を旅行、さらに両者を一括して旅行としたが、この特集号における旅・旅行もまたこれによるものである。

近世の旅は道中をも含めて楽しみを享受した。旅は徒歩であり街道沿いの寺社や観光地を旅人の関心に応じて参詣・見物することができた。伊勢参宮・善光寺参詣と旅の目的地はあったものの、出発から帰宅まで旅そのものを楽しむことが目的であった。だからこそ街道には多くの観光地や食物をはじめとする名物が成立し、街道景観は身近なもの、憧れの対象となり街道絵地図・絵画も多数つくられている。

近世の旅は毎日移動であり、少しでも多くのものを浅く広く見聞し、知的欲求を満足させるものであり、余程の理由でもない限り滞在型の旅

はなかったのである。

近代に入っても鉄道が発達する迄は近世の旅とほとんど変えることはなかったが、鉄道が発達し旅行の時代に入ると道中は消滅し、旅は点から点への移動となり、旅の時代と旅行の時代では日本人の地理認識にも大きな変化が生じたと考えられる。旅の時代食べる名物は旅人が食するものであったが、旅行の時代に入ると土産となり、新たな土産も登場し地場産業へと発展している。

旅行の時代に入ると近世のように数ヶ月も要する旅は社会的にも認められなくなるが、鉄道・バス・自動車等の交通機関の発達により都市近郊に多くの観光地が成立すると、一泊二泊の手軽な旅行が盛んに行われるようになった。しかも近世以来の寺社参詣をはじめとする観光地を巡る所謂観光旅行をはじめ、観光の内容は温泉・海水浴・登山・ハイキング・スキー等と多様化している。

旅行の表層の様相は大きく変化しても、少しでも多くの事象を見物したい、滞在するよりも各地を回りたいという近世以来の旅の遺伝子は今にも引き継がれている。こうした旅行におけるエネルギーギッシュな行動は日本人の行動様式の一側面をよくあらわしている。

展示を通し以上のことを明かにすることができたが、展示プロジェクト

トの会議においては新しい見解や斬新な意見・提案がなされたが、その全てを展示に反映することはできなかった。こうした成果を公表することにより、今後の旅行史研究に少しでも資することができればということで、本特集号を刊行した次第である。

（展示プロジェクト委員会代表、国立歴史民俗博物館研究部）